



川の水の量は、どうなっているの

雨水や地下水がもとになっている

山に雨が降ると、降った雨水の一部は蒸発し、一部は地下にしみこみ、残りは地面を流れて川になります。

地下にしみこんだ水は、地中に湿り気をあたえたり、植物の根に吸われたりしますが、ほとんどは、水を通しやすい地層にしみこんでいて、水を通しにくい地層（ねん土）の上にとまります。これを地下水といいます。

地下水の一部は、地層が切れているがけや谷などから、わき水や滝になって、川の水に流れこみ、川の水の量を増やしていきます。

また、川によっては、湖やぬま、池の水がもとになっているのもあります。

川の上流、中流、下流になるにつれて、水の量が多くなる

川の上流は、川はばがせまく、水の量は少ないのですが、中流、下流へと流れていくにつれて、川はばが広くなり、水の量が多くなります。

それは、たくさんの支流の水が、川に流れこんだりしながら、水の量が多くなっていくからです。また、中流や下流で雨が降ると、上流に比べて、まわりの地面から流れこむ水の量も、多くなります。

このように、川の水は上流、中流、下流へと流れていくにつれて、水の量が多くなってきます。（監修・国司 真）

